

日本記者クラブ会報

第170号
1984年
4月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話五〇三―二七二一(代)

次期事務局長に中村氏

第74回理事会で承認

三月十二日の第七十四回理事会で本年五月の総会で退任する笠置事務局長の後任として、中村貢氏(朝日イブニングニュース前代表取締役社長兼主筆)を任命することが承認された。同氏(写真)は昭和六十一年五月の通常総会までの一期二年間、初代前田雄二、二代藤本有典、三代笠置正明の三氏について、第四代目の事務局長を務めることとなる。中村氏は昭



中村氏は昭

和二十年朝日新聞に入社、社会部(大阪)、外報部を経てワシントン支局長、外報部長、ヨーロッパ総局長を歴任、昭和五十年五月には朝日イブニングニュース社長に就任、昨年六月に退任するまで社長職にあつた。また昭和四十年には記者活動を通じて国際親善と相互理解に貢献したとして「ボーン賞」を受賞している。大阪外語中国語科卒、大正十年生まれ。

新井理事長談

人選を一任されたが、中村氏は外国語も堪能、人格円満で、たとえ短期間であっても、当クラブの発展に大いに寄与していただけと信ずる。

中村貢氏談 日本記者クラブが世界的なナショナル・プレス・クラブに成長する道程の一期間、全力をこめて奉仕することができれば幸いです。と思っています。

五十九年度予算が成立

三月二十一日に開かれた当クラブ総会で、昭和五十九年度の事業計画ならびに年額二億四千万円の収支均衡予算が成立した。この予算総額は前年度比三・四パーセントの増である(八ページ参照)。総会の席上、次期事務局長の中村貢氏が出席者に紹介された。

クラブ賞二十五日に発表

三月十二日に開かれた理事会で、昭和五十九年度日本記者クラブ賞の選考委員会は、総務委員会(委員長 渡辺襄氏)の委員で構成する

ことが決まった。選考委員会は四月二十三日に開かれ、選考結果は同日引きつづいて開かれる理事会の承認を経て、二十五日に発表される予定である。

なお授賞式は五月二十二日に開かれる昭和五十九年度通常総会の席上で行われ、受賞者は同総会で名誉会員に推される。

選考委員の顔ぶれはつぎの通り。
委員長 渡辺襄(毎日) 委員 水上健也(読売) 藤村邦苗(サンケイ) 酒井新二(共同) 若松信重(中日) 田中武志(NHK) 東守之(東京放送) 山田年栄(新聞協会) 泉長人(民放連) 新井明(日経) 中江利忠(朝日) 常盤恭一(日本テレビ)

四月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六三〇人
個人会員	一、一四六人
法人・個人賛助会員	六四社
特別賛助会員	一八八人
名誉会員	七四人
計	二一〇社、二、〇五二人

とっておきの話

行方不明の 特派員を求めて



若松 信重

ベトナム戦争が激しかった一九六九年の新春は、私（当時中日新聞編集局長）にとって、特に重苦しい年明けだった。ベトナム戦線で取材中の佐橋嘉彦本社特派員が行方不明になったとの不安なニュースが、東京の外報部から年末に飛び込んできた。

同特派員は一九六八年十二月二十五日のクリスマス休戦を機会に、メコンデルタの昼間は政府軍、夜間は解放戦線が支配するぐいゆる競合区取材のため、ベトナム人助手リン君とともにカマウ市へ飛んだ。これ以上危険だからと同行を反対する助手に、十二月二十七日のサイゴン行き航空券を予約するよう言い残して、カマウ市内を流れる運河からナムカンの舟に乗った。しかし、予定の二十六日になっても帰らなかつた。

当時サイゴンには、富谷外報部次長が新年企画取材で出張中だった。日本大使館をはじめサイゴン駐在の日本人特派員の協力を得て、佐橋記者の消息を求めて

行動を開始、ベトナム語に堪能な大使館のM書記官同行のもとにカマウ市へも飛んだ。一方、社として東京、ブノンペン、パリなどで考えられるあらゆる手を打った。

最初ベトナム政府、米軍当局は佐橋特派員が解放戦線に逮捕、連行されたと言った。だがしばらくたつと富谷デスクからは、現地ベトナム側の見方は逮捕説から次第に潜入説に傾き始めているとの情報を報告してきた。佐橋特派員はカマウへ取材に出かける直前、急進派仏教指導者として一時政府側に抑留されたこともあるチ・クアン師をサイゴンのシロロ地区アンクアン寺院に訪ね、単独会見した。その際、カマウ地方の取材に備え同系の寺院への紹介状をもらっていたことが、ベトナム国警側に疑われていたようだ。

同行したリン助手は現地のベトナム国警、米軍当局から、佐橋特派員のカマウ市での行動について徹底的に取り調べを

うけたという。しかも同助手はサイゴン支局へ帰って一週間後、これまで八年間健康上の理由で許されていた兵役免除の特典を、急に取り消され兵隊にとられた。さらに事件発生から一か月ほどたったころ、南ベトナム国警から日本大使館経由——佐橋特派員は十二月二十五日、カマウ南方のキンサン地区で解放戦線に捕えられ、約二週間滞在後、小部隊に護送され舟でカンボジア方面へ向かった。同特派員は急進派指導者チ・クアン師の紹介状をもっているため、解放戦線側からは丁重な処遇を受けているもようである——といった回答があった。

解放戦線側は、事件発生以来沈黙を守っていた。佐橋特派員が取材を終えてひょこり帰ってくるかもしれない、との祈りたいような期待も次第に薄れて、不安は濃くなるばかりだった。二月十七日からのテト停戦を機会にひょつとしたら、との望みも消えた。しかも、メコンデルタ地帯へのB52の爆撃は激しさを加えていた。

三月に入ると東京の編集局長デスク、外報部長らと協議の上、私が名古屋からサイゴンへ飛ぶこととして渡航手続きを始めた。サイゴン空港へ着いたのは、三月二十四日。ベトナム戦争が始まってからサイゴンへは三度目だった。第一回は、国連脱退後のインドネシアのスカルノ大

統領と単独会見の帰途サイゴンに寄り、た。ちょうど滞在中に北爆が開始され、ベトナム戦争は激化の一途をたどった。三度目のサイゴンは、前回よりさらに緊迫していた。市内へも解放戦線からロケット砲弾が打ち込まれていた。そのまきぞえで、日本人特派員の殉職者もでていた。

キャラベル・ホテルにチェックイン、富谷デスク、それに佐橋特派員の後任の中俣特派員と協議したが、可能性は三つあった。

① 解放戦線側に抑留されている ② 不幸にしてB52の爆撃など戦火のまきぞえになっている ③ もしかすると南ベトナム国警側にひそかに抑留されている。前の二つに比べこの可能性は少ないが、私のサイゴン入りの直前に再度カマウへ飛んで調査した富谷デスクは、現地国警などの態度に何か割り切れない印象をいだいて帰っていた。

とりあえず日本大使館をはじめ日本人特派員諸兄、ベトナム外務省など関係方面に、これまでのご尽力へのお礼と今後ともよろしくとお願いに回った。厳重に警戒された米大使館本館に東京で顔知りのプレス担当M氏も訪ねた。この事件を米側がどう見ているか知りたかった。同氏はファイルの中からコンフィデンシャルのハンを押した書類をとり出しなが

ら、解放戦線側に抑留されているとの見方を示した。

最後に国警本部を訪ねた。テロ行為の目標にもなっているためか、鉄条網を張りめぐらし厳重な警戒。治安担当の国警本部次長マウ少佐と会った。同少佐は「サハシ特派員は、VCに後ろ手に縛られ目隠しをされ舟で連行されていくのを漁民が目撃している」と述べた。英語で話すその顔は、事実を語っているように思えた。少なくとも、第三の可能性はま

ずなさそうだとその印象をうけた。
いずれにせよ、将来佐橋特派員が帰ってきた際、今度は南ベトナム側とトランプを起ささないためにも、中日新聞はあくまで独立した新聞であり、佐橋記者も信頼できる特派員であることを強調して、今後ともよろしくとお願いして別れた。

サイゴンで各方面を回った結果、どうしても解放戦線側とも接触する必要がある。もちろん、当時のサイゴンでは全く不可能だった。隣国のカンボジアの首都プノンペンには武田特派員が駐在、事件発生以来解放戦線代表部にもたびたび接触しているが、編集局長としても責任上是非訪ねてできるだけの手は打ちたいと思った。

東京と連絡、サイゴンからバンコクを経てプノンペンへ飛んだ。当時新聞人の入

国は難しく時間がかかったが、外務省の協力もあって入れた。夜間、力石駐カンボジア大使を公邸に訪ねて事情を説明、協力をお願いした。

翌日、武田特派員と北ベトナム側にも強かった日本電波ニュースの鈴木特派員に案内されて、解放戦線代表部を訪ねた。プノンペンの中心部から東へ入った静かな高級住宅街にあった。乾季の終わるころで、夏の暑さの中に火炎樹の朱とバナナの葉の緑が印象的だった。応接間に通され、キム一等書記官が現れた。五十歳前後の年輩で、メガネをかけたもの静かな誠実そうな感じの人だった。

私はまず、中日新聞が特定の組織、団体と結びつきのない独立の新聞であること、世界の主要都市に特派員を出しており、佐橋特派員もその一人で信頼できるジャーナリストであり、クリスマス休暇を機会に、メコンデルタ競合区の取材にでかけて行方不明になっているが、解放戦線に敵意は全くいだいていないことを強調した。そして、何らかの誤解で解放戦線側に抑留されているかもしれないので、捜索に今後ともご努力願いたいと依頼した。

これに対しキム一等書記官はフランス語と英語で、佐橋記者の消息は確認できていないが、われわれの組織を通じてカマウ方面司令部への連絡には二か月近

くかかる。それは無線を使うと逆探知され爆撃されるので使えない。足でなるべく夜間密林の中を通過して連絡するからだ。とにかく必ず連絡します」と約束してくれた。ワラにもする気持ちだった。その際同書記官は、B52の爆撃ないしは戦火にまきこまれていくかもしれないというところが心配だが——とも語った。それは同時に、私たちも一番心配していることだった。

解放戦線側が事件発生以来初めて佐橋特派員の情報を確認したのは、五月十日のことだった。プノンペンの武田特派員の後任として赴任していた大江特派員が、私らの訪ねた解放戦線代表部から同日呼び出しをうけ、解放戦線中央委が佐橋記者の生存を確認した。同記者は元気で安全な場所に保護されている。米軍に協力した事実がない限り釈放する方針であるとの連絡をうけて打電してきた。半年近くたえず頭の上に重くのしかかっていたものがいっぺんに吹き飛んだ。

佐橋特派員が解放戦線から釈放されたのは六月四日夜、そして、南ベトナム側のいくつかの検問をくぐり抜けてサイゴン支局へたどりついたのは、六月六日夕刻だった。

釈放されてから分かったことだが、佐橋特派員はキンサン地区競合区で解放戦線ゲリラ隊に遭遇したが、アングアン寺

院からの紹介状のせい、隊長から三日間取材を許可され、二十七日帰ろうと思えば帰れた。しかし取材意欲を出し、もう一泊したことが運命の分かれになった。二十八日午前四時解放戦線正規軍兵士に寝ているところを逮捕され、目隠しをされ、黒いホ・チ・ミン服を着せられ舟で連行された。三日後ジャングルの中にある解放戦線カマウ刑務所の南京錠つきのオリの中に入れられた。

だが幸い二か月たった三月九日、ナンパー4と称する英語のうまい解放戦線の上級幹部が現れ、六日間にわたる取り調べの結果、容疑は晴れた。それ以後カギのない独房へ移され、待遇もガラリと変わった。そして四月七日、ナンパー4とともにカマウ刑務所を離れ、中央委から正式釈放許可がおりるまで農家に待機、五月三十一日から五日間解放地区の取材も許されたのだった。

同特派員の半年間にわたる迫真の抑留体験記「解放戦線の光と影」は新聞協会賞をうけ、昭和四十五年十月の東京大会で表彰された。同特派員（現在名古屋本社編集局長次長）のベトナム特派中に生まれた次男は、今春高校へ入学した。

わかまつのふしげ氏略歴 大正十四年愛知県出身。五九歳。多摩経済専門学校卒。昭和二十年中部日本新聞（現中日新聞）入社。カラチ、ワシントン特派員などを務め、四十三年編集局長。四十四年取締役、五十四年専務取締役東京本社代表。現在、東海テレビ放送副社長。五十六年五月から二年間日本記者クラブ理事長。

米大統領予備選

ワーキングプレス

アメリカの大統領選挙は、予備選たけなわ。民主党側にハート現象が起き面白くなってきた。確かに四年に一度の壮大な政治ショーだが、これを追う側からすると、実にフイジカルなドラマだ、というのが実感だ。

まず時間である。二月から十一月までの長丁場。その間に予備選。これもスーパーチューズデーとかスーパースタデーとか、数州の選挙や党員集会（コーカス）が集中している日から、イリノイ、ニューヨーク、テキサス、カリフォルニアなど雄州の予備選など、重要なふし目が一週間とか十日ごとにやってくる。

そのあと民主、共和両党の指名大会。そしてようやく、十一月六日に向けての本番の選挙に入る。モンデール候補のいう通り「マラソン」だ。初めから全速力で走ると息切れは必至だ。

つぎは距離の問題。

ワシントンとロサンゼルスでは、

時差が三時間もある広い国だ。ニューヨークで投票を締め切ったころ、ハワイでは朝食時間。だから、スーパーチューズデーなどになると、モンデール氏もハート氏も東奔西走。ポストンからアトランタ、パーミングハム、マイアミ、ワシントンと飛び回るが、選挙演説も一州で一か所ぐらいしかできない。

中盤戦でモンデール氏の組織力が

視点の置き方問われる報道

原

（朝日新聞社アメリカ総局長）

ハート氏の人気をはね返し始めたのも、急成長のハート陣営が時間と距離を克服できず、運動が物理的に浸透しないもろさがでてきたからだ。

取材する方も日本でいえば、今日は東京、明日は北京、明後日は香港、さらにマニラ、場合によってはシンガポールへ飛べ、という追い方になる。取材よりも移動に時間をとられ、ホテルは荷物を預けるだけの場所だけしかなくなる。

さらに構造問題。

時間と距離を乗り越えて現場へ着いても、取材がスムーズに行くとは限らない。日本のように中央選管が完備しているわけではない。米三大テレビ網は、投票をすませた人たちにアンケートした、いわゆるエキジツト・ポールを頼りに予想を出しているが、ニュースの時間が終われば、「現在のところ、開票率1%でモンデール三六%、ハート三二%。モン

康

デール氏の勝ち」などと割り切って番組を切る。日本のテレビのように途中経過をテロップで流してくれる親切もない。

結局、候補者の本部へ行って、いまだどんな情勢とみているか、と聞く以外にない。だから極端に言えば、アメリカの選挙の途中経過は、すべて推計といってもいい。

このようにフイジカルな選挙だけに、価値判断が大切になってくる。予備選は党大会への代議員選びであり、党員集会是寄り合いである。たとえば、越山会がもよりの家に三々五々集まって、「今度も角さんにす

るか」などと決めるようなものだ。だから、わずか十五人しか代議員を党大会に送らない州と百五十人も出す州では、予備選の報道の比重が違うわけで、勝ち負けだけを追っている狂いが出てくる。しかも、フイジカルな性格ゆえに、米三大テレビ網は、物量を投入して対抗している。そこで、最も現場に近づき得るテレビが、すべてを映し出しているものと錯覚しがちだ。視点の置き方に気がつかうドラマである。



スプリングフィールドで演説中のゲーリー・ハート候補（3月15日）写真提供=WWP

三浦・ロス狂奏曲

ワーキングプレス

「もうナイスガイでいることはできない」。忍耐にも限界があるとはばかりに、ロサンゼルス市警のクック広報官が声を荒げた。

会社社長三浦和義氏をめぐり、いわゆるロス疑惑が表面化してから一か月半、とうとう恐れていた事態が起きた。

ロサンゼルス市警と日本の報道陣のモヤモヤが、ついに火を吹いた。情報不足である取材陣のひとつが、ロス市警のタブーに触れたのである。

そのひとことを、正確に再現することはできない。しかし、トラブルの直後に会ったクック広報官は、怒りの理由をこう説明した。

「私がなぜこうして日本の記者に、捜査の指図をされなければいけないんだ。捜査のやり方を批判されるとは、私の長い警察キャリアで、最大の屈辱だ」

二月二十四日、ロス市警が

ロス疑惑に関連して初の記者会見を行った。Y紙が『三浦氏の元愛人、白石千鶴子さんとみられる遺体の検視記録を発見』と報じたのを受け、着のみ着のまま飛行機に乗った事件記者も含め、狭い会見室に約百人の報道陣があふれた。

この日を境に、取材合戦は一段と激しさを増した。遺体が千鶴子さんであるかどうかの確認がとれない。何か手がかりはないか、新しい情報

テレビ各局の猛ハッスル

石川 聡

(共同通信社ロサンゼルス支局長)

はないか。

日本での取材なら、夜討ち朝駆けも可能だ。だが、大事件の捜査中でも、夕方の定時退勤が励行されるのが米国情。日本から出張してきているのに、ロクなネタがないとなれば、こんなやり方を批判したくもなる。簡単にいえば、「ヤル気はあるのか」ということだ。

ロス市警始まって以来という取材騒動の中で、特に目立ったのはテレ

ビ各局のハッスルぶり。新聞と違い、番組が予定され、一定の時間枠があるとなると、何が何でもレポートしなければならぬ。A局は情報屋にひっかかったとか、関係者のインタビューに法外な出演料が積まれたとか、うわさが乱れ飛ぶ。

仲間うちのドタバタならまだいい。ロス疑惑の取材規模は、ロッキード事件発生当時よりも上だそうだが、実態はニュースショーの番組制作騒動であり、新聞

屋としては「テレビ屋さんはやはり金がある」と、ひがんでいれば済む。実際、一つの局から三つの

番組の取材班がきて、互いに競争しているのだからすさまじい。こんな雰囲気の中で起きたのが、捜査干渉発言事件だった。本音を引き出すには、挑発して怒らせるという初歩の取材テクニクだったかもしれないが、これはやはりつたなかつた。

温厚な人柄のクック広報官の次の言葉は、まだ耳に残っている。「ローカル(米国)のプレスは、

何も騒いでいないんだ。日本の報道陣だけなんだよ」

要するに、税金を払っていない人たちのためにここまでしてやっているんだ——といたいのだ。そのあげく、捜査のやり方まで口を出されては我慢できない、と怒るのも当然だ。

日本からのカミカゼ取材陣はやがて帰り、事件はそのうち忘れられる。しかし、ロス駐在の特派員には、ロス市警との関係修復という気の重い日々が続く。



初めて記者会見に応じたロス市警のクック広報官(2月24日)写真提供=共同

予算案衆院通過

ワーキングプレス

「予算案審議の微妙な時期に訪中日程をかなり前から無理やり組み込むのは、国会軽視もはなはだしい」——。五十九年度政府予算案が衆院を通過するか、どうか最大のヤマ場を迎えた三月上旬、社会党の国対幹部は自宅で、中曽根首相のラフな国会運営に対する姿勢を批判した。

昨年より十一日間も実質審議入りが遅れながら、大幅国会空転への有効打を放てないまま、順調な審議を許してきたいらだちもろがえた。それより、このベテラン野党国

対幹部を戸惑わせていたのは、大事な予算修正要求の折衝相手のことだった。「さて、誰と折衝すればいいのか、あすが与野党折衝第一回目というのに、自民党から事前に何の連絡もない。こんなことは初めてだ」。

通常なら、会談の運営について与野党はある程度の下打ち合わせをする。それが、今国会は、「出たとこ勝負」の

国会運営に様変わりした。自民党の江藤隆美国対委員長は病気で降板し、急拠、ほとんど国対経験のない森下元晴氏が起用されたことも国会混乱に輪をかけた。

昨年暮れの総裁声明で「田中元首相の政治的影響力排除」をうたった建前上、首相も国会運営にたけた田中派議員に頼らず、いちまつの不安を抱きながらも自派の森下氏に大事を託す以外はなかった。

「多頭政治」で国会混乱

明石 勲

(東京新聞政治部)

しかし、不安は的中。三月七日の与野党国対委員長会談は、いったん約束した内容をホゴにするという自民党の大失態を露呈した。①所得税の最低税率を一〇％に据え置くことは前向きに検討 ②所得控除の最低控除額は五万円引き上げる——。森下国対委員長の「気前」のいい回答には野党側もびっくりした。

この会談内容を知らされた自民党幹部はテンヤワソリで、まず藤尾政

調会長が、「こんなことでは無修正で予算成立を図る、との大方針が崩れる」と息まき、田中幹事長も苦虫をかみつぶした。

後日の取材で分かったことだが、この一件、森下氏の独走、大チョンボといった面だけではなかった。そこには党内派閥間の複雑な主導権争いがみえ隠れする。

森下氏は会談の途中、田中派の国対のベテラン、金丸総務会長には回答内容で大筋の了承

を得たが、藤尾政調会長ら福田派が牛耳る政調会には根回しをしなかったらしい。このため、独自

に野党との折衝を進めていた政調会側が激怒、与野党折衝は振り出しに戻ったというのが真相に近い。

「党三役はバラバラ。それぞれが個性豊かで、自民党は三頭体制だ。今では与野党ともにこんな風評が定着した。」

所得税減税、住民税減税を実施する代わりに減税額を上回る増税で賄う予算案。自民党大敗後の増税予算案審議だっただけに、当初は大変な

時期に予算案審議を担当取材することになったと、頭を痛めていた。しかし、新自由クとの連立で国会は表面上安定し、予算案は三月十三日に衆院通過した。暫定か「年度内成立」かの焦点はあったものの、あとは与野党のメンツの問題だけ。

結局、外交日程を錦の御旗に、強引に予算案審議を促進させた首相の作戦勝ちか。それだけに党内外の不満も増幅され、予算成立後に政局の本当のヤマ場がくるのかもしれない。



自民 大失態 露呈の3月7日の国対委員長会談

久米宏のTVスクランブル

スタジオ訪問

「こんばんわ。久米宏です。生放送にはハブニングがつきものでして、横山やすしさんは、さっき羽田へ着いて、今こちらへ向かっています」

三月十八日、日曜夜八時。日本テレビのKスタジオ。司会の久米さんの軽妙な語り口で、番組はアップテンポで進んでいく。

日本テレビの『久米宏のTVスクランブル』は昭和五十七年十月から登場した。新しいスタイルの情報・報道番組と新聞、雑誌などでも紹介された。しかし「どんな番組ときかれても答えようがない、というのが実感だった」と高村裕プロデューサー（オフィス・トゥー・ワン製作）はいう。

出演者は久米さんのほか常時ゲストの横山やすしさんと福富達さん（日本テレビ解説委員長）、そして女性アシスタントが一名。横山さんの起用は久米さんの強い要望で決まった。福富さんは、言うなれば番組の公式見解「役といったところだ。番組は「何でもベスト5」「ザッツ・マネー」「人間ウォ

ッチング」などいくつかのコーナーに分けられ、それぞれがその日のテーマで取材したVTRを素材に、久米VS横山のやりとりと福富さんの解説を中心にオムニバス風に進む。一次情報、いわゆるストレートニュースを、大上段に構えるのではなく、わかりやすい映像とやさしい言葉で論評する「二次情報番組」（高村）ということだ。

視聴率は平均二〇%強。日曜午後八時台というのは、東京では各局が視聴率を平均して分け合っている時間帯なのだから。

“感じさせる”をモットーの二次情報番組

うだ。

毎週火曜日午後、次回放送分の企画会議で各コーナーのネタ集めが行われる。

プロデューサー、ディレクター、構成担当の作家、それに久米さんも加わって十八人が出席する。この番組制作に関係するのべ八十人のスタッフの平均年齢は三十歳ちょっとといったところ。ネタは身近な話題だけにしぼり、三十代の平均的サラリーマンの視点でとらえるのが基本だ。この企画会議では、先々の放送分のネタ集めも行われるが、長いものでは一

年単位の企画になるものもある。

火曜の会議の後、水曜日から土曜日にかけてVTR取材が行われる。土曜日の夕方、そのVTRをみながら番組のライオンアップがつくられる。本番用に用意されるVTRは平均八〜九本だ。

日本テレビ側のプロデューサーの一人である久野忠雄さんは、永年報道のドキメントを手がけてきたが、今年一月から『TVスクランブル』のスタッフになった。「今までと全く違ったタイプの番組で、つくっていて面白い。勉強になります」と語る。

福富さんも、ジャーナリストとして新しく目を開か

れた思いがするという。福富さんは四十九年から九年間定時のニュース番組「NNジャストニュース」のキャスターを務めたが、今はこの『TVスクランブル』と『ズームイン朝』の解説を担当している。「例えば、『目白のヤミ将軍』という言葉も、『スクランブル』の中でなら使える。自分で解説の題材を決めて、自分の言葉でコメントできる番組に出会えたのは、ラッキーでしたネ」。

番組の中に「福富達の政治スクランブル」というコーナーがあり、内外の政治問題を中・高校生にもわかるように解説している。事件が起きれば生放送の強み

を生かし、最新のニュースを取り上げ、急拠コメントすることもある。

福富さんは、テレビ・メディアの原点は、音と映像と臨場感を最大限に駆使し、しかもお年寄りから子供までにわかるように伝えるところにあると主張する。

「カラーで、音があつて、動きがあつて、そして同時進行できる生放送というテレビの特性をフルに生かしたのが『TVスクランブル』。感じさせるニュースを伝えることが、テレビ報道の原点だと思いますヨ」

（長谷川）



夕方5時から始まったカメラリハーサル。横山やすしさんは全くの白紙状態で本番にのぞんでもらうために、これには立合わない。また、スタジオに迎える観客にも本番までは、モニター、小道具などを一切見せないようにしている。

昭和59年度予算

自 昭和59年4月1日
至 昭和60年3月31日

第二十三回総会（臨時）

（昭和59年3月21日（水）
日本記者クラブ記者会見室）

社団法人日本記者クラブ第二十三回総会（臨時）は、三月二十一日午後三時からクラブ記者会見室で行われた。出席法
人会員二四社、委任法人会員九八社、計一二二社の出席をも
って成立（定足数七四社）、新井明理事長を議長に選り、議
事を進めた。

昭和五十九年度事業計画ならびに同予算を原案どおり全員
一致で可決したほか、左記の役員の一部交代を承認した。

理事 西日本新聞社（滝口凡夫氏↓藤吉保徳氏）
監事 北海道放送（深谷勝清氏↓日下部弘明氏）

議事終了後、新井理事長が次期事務局長として中村貢氏
（朝日イブニングニュース前代表取締役社長兼主筆）を出席
者に紹介した。

科 目	予 算	
	月 額	年 額
	円	円
支出の部		
事業費	12,329,000	147,948,000
借室維持費	10,031,000	120,372,000
借室料	7,627,000	91,524,000
共益費	1,367,000	16,404,000
空調・光熱・水	1,037,000	12,444,000
会議費	170,000	2,040,000
事業運営費	900,000	10,800,000
会報発行費	720,000	8,640,000
運営雑費	85,000	1,020,000
通信費	150,000	1,800,000
印刷費	230,000	2,760,000
交通費	43,000	516,000
管理費	1,106,000	13,272,000
クラブ管理費	696,000	8,352,000
清掃費	216,000	2,592,000
その他	480,000	5,760,000
機器備品費	100,000	1,200,000
消耗品費	130,000	1,560,000
事務委託費	130,000	1,560,000
事務雑費	50,000	600,000
人件費	5,198,000	62,376,000
給与	3,044,000	36,528,000
賞与・諸手当	2,074,000	24,888,000
厚生費	80,000	960,000
諸積立金	580,000	6,960,000
資産準備積立金	500,000	6,000,000
退職積立金	80,000	960,000
予備費	807,000	9,684,000
計	20,020,000	240,240,000

科 目	予 算	
	月 額	年 額
	円	円
収入の部		
プレス会員会費	13,991,500	167,898,000
法人会員会費	9,600,000	115,200,000
個人会員A会費	1,963,000	23,556,000
〃 B 〃	145,000	1,740,000
〃 C 〃	817,500	9,810,000
〃 D 〃	1,466,000	17,592,000
賛助会員会費	3,664,000	36,690,000
法人賛助会員会費	2,287,500	27,450,000
個人 〃	295,000	3,540,000
特別 〃	475,000	5,700,000
クラブ利用費収入	136,000	1,632,000
貸室料	1,450,000	17,400,000
雑収入	1,385,000	16,620,000
特別収入	485,000	5,820,000
施設機器賃貸料	150,000	1,800,000
受取利息・その他	750,000	9,000,000
計	20,020,000	240,240,000

昭和五十八年度

事業報告

一、会合

社団法人日本記者クラブは、昭和58年4月1日から昭和59年3月31日までの間に、つぎのような諸行事を行った。行事の総回数は一二四回で、うち会員懇親会などクラブ行事が三回（参加者平均以下同じ）一五九名）、昼食会一八回（九七名）、夕食会一回（三七名）、記者会見三三回（七七名）、講演・研究会四〇回（五八名）、見学会三回（四五名）のほか、趣味の会（囲碁・ゴルフ）一二回、映画試写会一四回だった。

クラブ行事

行 事 名

行 事 名	日 付	参 加 者	記 録
総会記念講演Ⅱ桑原武夫京 都大学名誉教授	昭和58年 5月24日	七三名	
会員懇親会	昭和59年 1月19日	一一五名	
新年五礼会員懇親会		二八八名	168号

昼 食 会

ゲ ス ト 名

ゲ ス ト 名	日 付	参 加 者	記 録
ステイグ・ラメル ノーベ ル財団理事長	昭和58年 4月18日	二二名	161号
趙治勲棋士	4月21日	四五名	159号
マルコム・ポルドリツジ米 国商務長官	5月20日	一五六名	160号
藤岡真佐夫アジア開発銀行 総裁	5月30日	五一名	

安倍晋太郎外務大臣
真藤恒日本電信電話公社総
裁

モハマッド・ジアウル・ハ
ク パキスタン大統領
石橋政嗣社会党委員長
前川春雄日本銀行総裁
松下康雄大蔵省事務次官
小倉武一政府税制調査会会
長
稲山嘉寛経団連会長
中曾根康弘内閣総理大臣
後藤田正晴行政管理庁長官
田川誠一自治大臣
春日一幸民社党常任顧問
田中六助自民党幹事長
V・E・スベツァーノ ガネ
社副社長

夕 食 会

ゲ ス ト 名

ゲ ス ト 名	日 付	参 加 者	記 録
モハマッド・ハッサン・ミ ルヘム ハルフル市市長	昭和58年 4月1日	三四名	159号
ハー・パン・ラウ ベトナ ム外務次官	4月4日	四五名	
モハマッド・ホスニム・ム バラク エジプト大統領	4月7日	二二〇名	
姚依林中国副首相	4月8日	一〇二名	
イボン・ガタズ フランス 経営者全国評議会議長	5月11日	三九名	160号

記 者 会 見

ゲ ス ト 名	日 付	参 加 者	記 録
野坂昭如氏	昭和59年 1月11日	三七名	168号

中曾根康弘内閣総理大臣
A・W・クローセン世界銀
行総裁

ソーン・サン民主カンボジア
連合政府首相
竹下登大蔵大臣
土屋正忠武蔵野市市長
ケンブル・フレイザー英国
産業連盟会長
オットー・G・ラムスドル
フ西ドイツ経済大臣
ジェームス・H・ピリント
ン ウッドロー・ウイリン
ン 国際学術研究所所長
赤松良子労働省婦人少年局
長
ポール・シニルター デン
マーク首相
クルト・フルグラシー スイ
ス経済大臣
ポール・ハートリントン 国連
難民高等弁務官
フロイド・D・シモムラ米
国日系市民協会会長
ジョン・R・オベル IBM
会長
ヘルムート・コール 西ドイ
ツ首相
胡耀邦中国共産党総書記
片桐政美民社党選対副委員
長
山口敏夫新自選対委員長
桑原信夫共産党選挙・自治
体局長
大野潔公明党選対委員長
小沢一郎自由民主党選挙本
部事務局長
田英夫社会民主連合代表

日 付	参 加 者	記 録
6月20日	一〇六名	161号
7月12日	七三名	163号
7月20日	二二一名	162号
10月18日	一一八名	165号
10月21日	八三名	
10月25日	七一名	
11月2日	七六名	166号
12月15日	六二名	167号
昭和59年 1月13日	二二二名	168号
1月26日	五八名	
2月1日	八九名	169号
3月15日	八五名	170号
3月16日	一三五名	
3月22日	七八名	
5月19日	二三八名	160号
5月23日	五七名	
6月9日	七六名	161号
6月14日	九二名	
7月7日	四三名	162号
7月13日	六四名	
7月18日	六七名	
7月28日	三四名	
8月2日	五七名	163号
8月31日	三二名	
9月5日	一九名	164号
10月25日	三四名	165号
10月27日	一一一名	166号
11月2日	二二三名	
11月26日	二二〇名	
12月13日	五〇名	167号
12月14日	三八名	
12月14日	四二名	
12月14日	五五名	
12月14日	六四名	
12月14日	三三名	

安恒良 一日本社会党選対委員長
 ジャン・ル・ガレック 仏首相付政務次官
 ジェームス・リー・ホーク オーストラリア首相
 ダビット・キムヒ イスラエル外務次官
 ジェームス・M・ベッグス 米国防空宇宙局長官
 ジョアキム・A・チサノ モザンビーク外務大臣

昭和59年 12月14日 五一名 167号
 昭和59年 1月20日 三〇名 168号
 2月2日 一七〇名 169号
 2月17日 四八名
 3月13日 七二名 170号
 3月22日 二一名

講演・研究会

ゲスト名

市川真紀夫 石油評論家
 北原安定 日本電信電話公社副総裁
 ロバート・ジョン・オニール 国際戦略問題研究所所長
 矢島鈞次 東京工業大学名誉教授
 森英恵 デザイナー
 村上泰亮 東京大学教授
 ウィリアム・ピーズ 米国外務省経済担当公使
 小長啓一 通産省産業政策局長
 モハメド・サラール カイロ国立博物館館長
 西村文夫 国際問題研究所主任研究員
 青木日出雄 航空評論家
 木下和夫 政府税制調査会会長代理
 明石康 国際連合事務次長
 江崎玲於奈 博士
 青木茂 参議院議員

昭和58年 4月20日 五八名 増刊
 4月25日 一〇〇名 159号
 5月6日 六四名 160号
 5月9日 五四名
 5月25日 三二名
 6月8日 六八名 増刊
 6月10日 五三名 161号
 6月23日 八八名
 6月28日 二三名
 7月12日 九三名 162号
 7月19日 五三名 増刊
 6月25日 七八名
 7月29日 四七名 162号
 8月5日 五六名 163号
 8月25日 四二名

田中章介 経企庁前海外調査課長
 袴田茂樹 青山学院大学助教
 石弘光 一橋大学教授
 石原祥雄 防衛庁装備局開発計画官
 矢田次夫 前統合幕僚会議議長
 長富祐一郎 大蔵省審議官
 広海正光 通産省産業政策局調査課長
 山田充彦 日興リサーチセンター取締役
 堀和雄 警察庁薬物対策室長
 細見卓海 外経協協力基金総裁
 鷹尾洋保 防衛庁航空幕僚監部技術部長
 佐藤経明 横浜市立大学教授
 藤木平八郎 軍事評論家
 西村功住 友銀行常務取締役
 鈴木淑夫 日本銀行金融研究所副所長
 中村孝士 東京経済大学教授
 関川栄一郎 航空評論家
 竹中一雄 国民経済研究協会会長
 小和田恒前ソ連公使
 パートン・M・セービン ジョージワシントン大学教授
 山本晋也 映画監督
 西元徹也 防衛庁運用課長
 榑原英資 国際金融情報センター総務部長
 竹内一郎 東京銀行参与
 井上忠雄 防衛研修所所員

8月31日 六八名 163号
 9月14日 六五名 164号
 9月20日 四二名
 9月21日 八三名 増刊
 9月27日 九〇名 164号
 10月3日 五七名 165号
 10月12日 三五名
 10月24日 四三名
 10月27日 二一名
 11月17日 五六名 166号
 11月22日 五八名 増刊
 11月25日 六四名 166号
 12月7日 六七名 167号
 12月21日 三九名
 昭和59年 1月6日 六〇名 増刊
 1月9日 六三名 168号
 1月11日 三五名
 1月23日 四一名
 2月2日 九六名 169号
 2月10日 四七名
 2月15日 六四名
 2月16日 五五名
 3月6日 六〇名 170号
 3月7日 六三名
 3月23日 五一名

見学会

見学地 日付 参加者記録
 東京電力燃料電池発電実験プラント 昭和58年 6月6日 四一名 161号
 南極観測船「しらせ」 昭和59年 6月29日 六四名
 日本電気我孫子事業場OAシステム 昭和59年 1月25日 三〇名 168号

試写会・映写会

小説吉田学校 (58・4・4/5/6) ソフィーの選
 択 (4・11) 南極の大地 (6・28) 南極物語 (7・21)
 愛の七日間 (8・16/9・12) はだしのゲン (8・24)
 この子を残して (9・13) インタビューアー (10・11)
 パッション (10・11) ウォーゲーム (11・7) ダント
 ン (12・13) ザ・デイ・アフター (12・22) ジョーズ
 3 (59・1・12) 愛と追憶の日々 (2・2)
 囲碁同好会 (58・4・23 5・28 6・25 7・23
 9・24 11・5 12・17 59・1・28 2・25 3・
 24)
 ゴルフ同好会 (58・7・22 10・28)

二、会報の発行

毎月一回(十日)『日本記者クラブ会報』を発行し
 たほか、講演記録版として臨時増刊号を五回発行し、
 会員の参考に供した。

三、日本記者クラブ賞の授与

昭和58年度日本記者クラブ賞を斎藤茂男氏(共同通
 信社編集局社会部兼編集委員室編集委員)に贈った。

四、会員名簿の作成

昭和五十八年六月一日現在で会員名簿を作成し、全
 会員に配布した。

先月のクラブゲスト

榊原英資 国際金融情報センター総務部長



急進展の金融
・資本市場自由
化論議の背景を
国内要因と外圧
にわけて整理
し、今後の見通しを語る。(六日(火)
シリーズ研究会、金融・資本市場の自由化(Ⅰ)
司会 鈴木幸夫企画委員 出席 六〇人)

竹内一郎 東京銀行参与



わが国の戦後
復興型の金融制
度が現実合わ
なくなり、基本
的に金融市場の
近代化が求められている。そこへ例
によって、外圧。「年内に新制度の
あり方確定」の勢い。(七日(水) シリ
ーズ研究会「金融・資本市場の自由化(Ⅱ)」
司会 鈴木幸夫企画委員 出席 六三人)

ジェームズ・M・ベッグス
米国航空宇宙局長官

一月二十五日、レーガン大統領が
一般教書演説で、「恒久的有人宇宙
ステーション」計画を発表し、西側
同盟国の参加を呼びかけた。ベッグ



ス長官は大統
領特使として
来日、会見場
には有人宇宙
ステーション
とスペースシ
ャトルの模型
も持ち込まれた。82年のドル価値で、米国
は80億ドルの投資を予定し、「欧州には
15億〜20億ドル、日本には7億5千万
12億ドル」を期待したいと述べる。
(三日(火) 記者会見 司会 有賀忍企画委員
通訳 米倉淑子 出席 七二人)

春日一幸 民社党常任顧問

「委員長でなく春日さんをお招きした
のは、党創始者の一人であり、政界のフ
ィクサーでもあるから……」と司会者。
「久方ぶりに登場させていただき光栄に
存じます。大半はオールドフレンドなの
で、どこがオ
フレコかは皆
さまの方で
……」と春日
氏。



自民党との
連合について
は、「自民党がどうしても民社の協力を
求めねばならぬと思いつめた時だけで、
軽々には腰を上げない」と慎重発言。し

田中六助 自民党幹事長



かし「特定派閥でなく、非主流、主流と
も等間隔に見ていかねばならない」とし
て、従来の自民党非主流派との連携か
ら、自民党全体との連合に軌道修正して
いることも示唆した。(五日(木) 昼食
会 司会 一木豊企画委員 出席 八五人)

「相変わらず
ずのおしゃべ
り六助ぶり
で、今日もそ
のため国会が
止まっていま
す」。十五日
の会見での「暫定予算になればパート減
税など反古」との幹事長発言をめぐり、
この日国会空転。「ここへ来るのもユー
ウツで、一番悪いところへ行くんでは
ないか」といわれて……。

外の降雪のせいもあってか、この日は
じっくり言葉を選び、政治家・田中六助
氏の「日本丸運営の政治哲学」をシンミ
リときかせた。(二六日(金) 昼食会
司会 藤村邦苗企画委員長 出席 一三五人)

ジョアキム・アルベルト・チサノ
モザンビーク外相

二十代でポルトガルからの独立を目指
すモザンビーク解放戦線に加わり、七四



年暫定政権で首相
に、七五年六月独立
とともに外相就任。
同国からは初の政府
要人の訪日。南アと
の不可侵条約締結や南部アフリカの政情
に関して、突っ込んだ内容の質疑応答が
行われた。(二三日(木) 記者会見 司会 石
丸和人企画委員 通訳 水野慈子 出席 二二人)

ビンセント・E・スペツァーノ
ガネット社副社長



「USAツデー」
の太平洋地域での発
行の可能性を探る調
査団团长として来日
のスペツァーノ氏。
「東京での協力相手を探している。これ
から何度が来日することになる」。二
二日(木) 昼食会 司会 本島宏企画委員 通訳
佐藤敦子 出席 七八人)

井上忠雄 防衛研修所所員



化学兵器の概要、化学戦の事例、今後
の動向について話を
聞く。抑止力から使
われる兵器へ危険増
大。(二三日(金)
シリーズ研究会「軍事技
術(Ⅴ) 司会 本島宏企画委員 出席 五一人)

プロフィール

四月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員の方がたです。



小山プロから白星をあげたのは大日向、滝川の
両三段だけ。他の会員は星六つを献上した。

◎囲碁の会◎

三月二十四日の例会は、小山嘉代準
棋士二段を迎え、参加二十三人、総対
局数五十六局と史上二番目の盛況とな
った。成績優秀者は次のとおり。

山中昭初段（中国新聞）、滝川勇三
段（時事通信）以上両氏は初参加。
吉沢正也五段（D）、村上孝止五段
（新聞協会）、伊藤光彦五段（毎日）、
大日向一郎三段（日経映画）、井出新
六二級（D）。

次回は四月二十八日（土）午後一時
から。

紹介 会合

2日▽第16回テレビ大賞授賞式・パーティー(東京ニュース奥山忠会員) 7日▽Meet the Companies Meet the Foreign Press (フォーリンプレスセンター 河村欣二会員) 8日▽在京岐阜県人懇談会 ゲスト 野村克也 野球評論家(岐阜日 白井英雄会員) 9日▽北日本政経懇話会(北日本新 堀田良一会員) 10日▽JNN報道部長会・懇親会(TBS 太田浩会員) 11日▽ニッサンドリームコンサート発表記者会見 12日▽新日フィルとさだまさしのジョイントコンサート 4月28日を皮切りに全国十八か所で開催する(ニッポン放送のコンサートを開催する(ニッポン放送 佐久間寛夫会員) 9日▽放送通信制度研究会(NHK 片岡俊夫会員) 10日▽デリー会 元ニューデリー特派員の集い(日経 堤輝夫会員) 12日▽「生きていく私」制作発表会(毎日放送 木村孝会員) 13日▽前田義徳さんを偲ぶ会(東海テレビ 土井哲夫会員) 14日▽第3回サザンクロス賞(日豪ジャーナリズム賞) 授賞式・パーティー 15日▽大沢水紀雄記者(日経)が受賞(吉田力会員) 15日▽民間放送・地方局懇談会

(民放連 泉長人会員) 16日▽第2回年間最優秀プロデューサー賞表彰式・パーティー 中村清早大競争部監督、横沢彪フジTVプロデューサー、大原れい子テレビマンユニオン・プロデューサーが受賞(電通 藤岡和賀夫会員) 17日▽第15回春の高校バレー話題と展望——松平康隆氏を囲んで(フジTV 土井泰彦会員) 19日▽ジョゼフ・ダニエル政府広報室長歓迎レセプション(協会 阪田秀会員) 20日▽フルブライト留学生東京会(フォーリンプレスセンター 河村欣二会員) 21日▽新聞協会・製紙連合会合同用紙委員会(協会 薄井猛会員) 23日▽東京愛媛クラブ(愛媛新 堀定省会員) 24日▽国際婦人の十年世界会議「シャハニ事務局長記者会見(国連広報センター デビッド・ユクセレイ会員) 27日▽「ヒロシマ・アピールズ1984」記者会見(中国放 秋信利彦会員) 28日▽ホワイト・ベアー・スポーツ表彰式 北沢欣浩(スケート)、江上由利(バレーボール)、久島啓太(相撲)、京大アメリカンフットボール部が受賞(デイリースポーツ 柿本宗之介会員) 28日▽藤竹曉さんを囲む会(NHK 山口秀夫会員)

「会員がクラブ施設を利用して行った会合の主なものです。三月の総回数は一〇三回でした。」

日本記者クラブ賞推薦委員会

昭和59年3月1日(木)
日本記者クラブ小会議室

(内容は前号既報)

出席 殿木圭一委員長。平田真巳、村上孝止、野崎茂、村尾清一、大森幸男の各委員。

第28回総務委員会

昭和59年3月6日(火)
日本記者クラブ大会議室

(内容は前号既報)

出席 渡辺委員長。藤村、酒井、山田、泉の各委員。新井理事長、中江、常盤の両副理事長。

第80回会員資格委員会

昭和59年3月7日(水)
日本記者クラブ小会議室

四月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 水上委員長。中川、赤松、加藤、亀山、内藤、上野の各委員。

第74回理事会

昭和59年3月12日(月)
日本記者クラブ大会議室

次の事項について審議、決定した。

- 一、昭和59年度事業計画及び収支予算理事会案(第23回総会に上程)。
- 二、日本記者クラブ賞選考委員会の設置。
- 三、会員の入退会。
- 四、総会の議事日程。
- 五、次期事務局長人事。

出席 新井理事長。中江副理事長。水上、藤村、酒井、太田、若松、藤吉、南里、田中(武)、東、松元深谷、成田、山田、泉、前田の各理事。

第49回会報委員会

昭和59年3月13日(火)
日本記者クラブ大会議室

四月号から新企画として「スタジオ訪問」を連載することを決めた。各局のスタジオを訪問し、報道・情報番組を紹介するもので、制作の苦労話やエピソードもきく。

出席 深谷委員長。桂、井出、安延の各委員。

第110回企画委員会

昭和59年3月14日(水)
日本記者クラブ大会議室

先月の行事について司会を担当した委員から報告があり、その後四月の行事とクラブゲストの選考について協議した。

出席 本島、伊藤、森本、一木、広瀬、平田、有賀、石丸、水野、武藤、鈴木、河野の各委員。

第7回施設運営委員会

昭和59年3月27日(火)
日本記者クラブ小会議室

図書類の整理の仕方、メニュー改定、ルールブックの「貸室利用」の内容について検討した。

出席 梅本、庭植、広瀬、山崎の各委員。

写真部

◇こわごわ欄干みがき◇



写真 石黒 潔 (サンケイ新聞写真報道室)

指示抜き過勤の仕事師

一月十九日、十五年ぶりの大雪となった首都圏は、夜の間にその雪が凍結して翌二十日、こんどは歩行者が滑り転んで、骨折やら打撲やらの事故が続出した。

だが、都民が滑り転び始める二十日早朝の時点で、それを予測し、取材を指示することは、記者もデスクも雪に不慣れな都市住民の情なさで、ご同様にへんむずかしい。

この写真を撮った石黒記者に電話で聞いてみた。

——どうやって、この「手すり磨き」のカンをつけたんですか。

「入学試験の願書受け付けの取材で朝七時ごろ市谷見附を通ったんです。橋の上が凍って、こりゃ滑るなど、帰社の途中寄ってみたわけです」

——転倒事故を予測して？

「念のためです。行きは早朝で人がいませんでしたから。転ぶ人もいませんが、それより手すり磨きの通勤者の行列が状況にビタリだと」

唐突だが、記者にとって過勤料って何だろう。石黒記者は勤務時間内に鋭いカンで撮ったのだが、時間外だって指示など待たずに撮るに決まっているのだから。

(文・中沢道明会員)

中川順会員（テレビ東京）が民放連会長に

日本民間放送連盟は三月十六日、五十八年度第二回定時総会を開催、任期満了に伴う役員改選を行い、会長に中川順テレビ東京代表取締役社長を選出しました。副会長は以下の三氏です。横山良一北日本放送代表取締役社長、高木一見毎日放送代表取締役社長、久野昌輝テレビ西日本代表取締役社長。

サンケイ・尾崎会員にポーン・上田賞

サンケイ新聞の尾崎龍太郎会員（国際報道部次長）が、八三年度の「ポーン・上田賞」を受賞しました。同賞は、国際ニュース報道に功績のあった記者に贈られるもの。尾崎会員の、ソ連軍アフガン侵攻、イランでの米人質奪回作戦などの報道ならびに中東、アフリカ、西欧などでの移動特派員経験を生かした国際時評が評価されました。

日経・大沢氏にサザンクロス賞

八三年度「サザンクロス賞」（日豪交流ジャーナリズム賞）が、大沢水紀雄日本経済新聞前シドニー特派員に贈られました。

同賞は、豪日交流基金がオーストラリアに関して優れた報道をしたジャーナリストを表彰するもので、三月十三日クラブ宴会場で授賞式が行われました。

ブルネイ国王の会見中止について

三月二十九日付の会合案内で、ブルネイのハサナル・ボルキア国王の記者会見を、四月七日（土）午後一時三十分からと通知いたしましたが、ゲストの都合で急に中止になりました。

お申し込みをいただいていた方には、事務局から電話で中止になったことをお伝えしましたが、あらためておわび申しあげます。

録音テープをご利用ください

クラブ主催の昼食会、記者会見、研究会の講演、質疑応答を録音したカセットテープが事務局に保管されております。お越しになる前に、事務局へお電話いただければ、ラウンジ内のライティングブースでおききいただけるよう準備いたします。

プレスセンターの電話番号変更

日本プレスセンターの電話番号が変わりました。新番号は五八〇一一五八一〜四です。

新企画「スタジオ訪問」始まる

本号から新企画「スタジオ訪問」の連載を始めました。テレビ、ラジオ各局のスタジオを訪ね、報道・情報番組を紹介します。番組制作の苦労話やエピソードのほか、プロデューサーや出演者の放送ジャーナリズムに対する意見などもうかがえればと思っております。ご愛読ください。

会員の著書（ご惠贈いただきました）

那馬彦（台）国々発見記

志岐一郎

寄贈書

燃えよ高知の教育

高知新聞社



ジェフ・アーソン 研修計画
（ハワイ・イースト・ウエストセンター）参加者八名

トセンター）参加者八名

展覧会の招待券 朝日新聞社から『東京藝術大学所蔵名作展』（4月19日〜5月1日）の招待券をいただきました。ご希望の方はクラブ受付へお申し出ください。

四月の行事

16日（月）午後三時〜四時三〇分 キブリアES

CAP事務局長記者会見 クラブ記者

会見室

19日（木）午後二時〜三時 フォン・クーンハイ

△BMW会長記者会見 クラブ記者会

見室

20日（金）午後二時〜四時 シリーズ研究会『軍

事技術』（VII）評論家・立花正照ク

ラブ記者会見室

26日（木）正午〜午後二時 ジェフリー・ハウ英

国外相昼食会 クラブ宴会場

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫

連絡 長谷川 河野（事務局）五〇三一二七二一